

養護教諭志望学生における養護教諭に対するイメージの変容

Transition of images about Yogo teacher (school nurse) among college students who aim to obtain a certificate of yogo teacher.

後藤 多知子・萩原 琴弥・後藤 和史

愛知みずほ大学人間科学部人間科学科

Tachiko Goto · Kotomi Hagiwara · Kazufumi Gotow

Department of Human Sciences, Aichi Mizuho College

This study focused on an transition of images about Yogo teacher (school nurse) among college students who aim to obtain a certificate of Yogo teacher. 75 college students who aim to obtain a certificate of Yogo teacher completed a questionnaire about their past experiences in school health room and descriptive images of Yogo teacher. Co-occurrence network using text mining found that images about Yogo teacher were more professional as students' grades were upper. These findings suggest that images of Yogo teacher might be altered to professional perspective from school-children's view through Yogo teacher education.

Key Word: Yogo teacher, Yogo teacher education, Co-occurrence network

I はじめに

近年、養護教諭は学校保健活動の推進にあたって、保健主事と共に中核的な役割が認められている。児童生徒の健康課題の解決に向けて重要な責務を担っている¹⁾中、養護教諭の志望者数は増加傾向が続き、人気職となっている²⁾。下村の養護教諭志望学生に対する志望動機調査³⁾では、これまでの校種における学校生活での養護教諭との関わりが指摘されている。志望学生は、過去に接した養護教諭に好意を寄せる者と、養護教諭の職務内容に関心が高い者が9割以上を占め、過去の保健室利用の際に、養護教諭の職務を身近に観察し、それに魅力を感じていることが指摘されている³⁾。

では実際には、養護教諭志望学生は「養護教諭」に対し具体的にどのようなイメージを持っているのであろうか。各志望学生のプロトタイプ像（「養護教諭」という職種の基準的イメージ）を表す語は何か。養護教諭を目指すにあたっての根幹のイメージは、養成教育の過程で変化するのか。

養護教諭イメージがどのように形成されるのかに関する研究は、永浜・宮城(2005)⁴⁾や満田・今村(2006)⁵⁾などがあり、養護教諭教育によってイメージが変化することを示唆している。しかし、もともと志望学生が持っていた養護教諭イメージがどのように形成されるのかに関する先行研究は現在のところ見当たらない。ただし、学生個人が小学校入学から高等学校卒業まで保健室を利用してきた経験や養護教諭との関わりに関する体験が、養護教諭イメージ形成の一要因となりうることに疑問はないだろう。

そこで、養護教諭を志望する学生に対し、これまでの保健室利用状況および「養護教諭」からイメージする語について調査を行うことで、養護教諭イメージがどのように形成され変化していくのかを検討することを本研究の目的とする。

II 方法

1. 調査時期・調査対象・調査方法

2010年5～9月にA大学の養護教諭志望学生1～4回

生合計 75 名に対して質問紙による調査を行った。調査は講義時に実施し、研究目的および回答内容を本研究以外の用途には使用せず、個人データの漏出はないこと等を口頭で説明した。

2. 調査内容

質問紙により、これまでの校種における保健室の利用状況を 6 件法で回答し、主な利用理由を自由記述させた。また、「養護教諭」からイメージする語を 5 つ挙げ、その語を挙げた理由をそれぞれ自由記述させた。

3. 分析ソフト

統計パッケージ SPSS for Windows ver. 12 および計量テキスト分析ツール KH Coder を用いた。KH Coder は計量テキスト分析やテキストマイニングのためのソフトウェアで、新聞記事、質問紙調査における自由記述回答、インタビュー記録など、社会調査によって得られる様々な日本語テキスト型データを計量的に分析するために使用されている⁶⁾。計量テキスト分析とは、文字データを数値化し、データを整理、分析、理解す

る手法である⁷⁾。

III 結果

1. 養護教諭志望学生のこれまでの校種における保健室利用状況と主な利用理由について

養護教諭志望学生 1~4 年生 75 名について、これまでの校種（小学校~高等学校）における保健室利用状況を集計した（表 1 参照）。集計に当たって保健室利用状況についての、「毎日利用した」および「週に 2~3 回利用した」の回答を『よく利用した』、「週に 1 回利用した」および「月に数回利用した」の回答を『やや利用した』、「年に数回利用した」および「全く行かなかった」の回答を『あまり利用しなかった』の 3 つのカテゴリーに分けた。集計の結果、『よく利用した』学生は、小学校低学年では 8 名（10.7%）、小学校高学年では 17 名（22.7%）、中学校では 26 名（34.7%）と、中学校までは、学年が上がるにつれて高率となった。高等学校においては減少し 17 名（22.7%）であった。

表 1 養護教諭志望学生(1~4 年生)のこれまでの校種における保健室利用状況

利用頻度	小学校低学年 (1~3年生)	小学校高学年 (4~6年生)	中学校	高等学校
よく利用した	8 (10.7%)	17 (22.7%)	26 (34.7%)	17 (22.7%)
やや利用した	24 (32.0%)	26 (34.7%)	20 (26.7%)	23 (30.7%)
あまり利用しなかった	43 (57.3%)	32 (42.7%)	29 (38.7%)	35 (46.7%)
計	75 (100.0%)	75 (100.0%)	75 (100.0%)	75 (100.0%)

人数 (%)

表 2 養護教諭志望学生のこれまでの校種における主な保健室利用理由

(各校種において保健室を月に数回以上利用した 1~4 年生の回答)

主な来室理由	小学校低学年 (1~3年生)	小学校高学年 (4~6年生)	中学校	高等学校
けが・ 体調不良時	14 (43.7%)	13 (30.2%)	4 (8.6%)	6 (15.0%)
相談時	2 (6.3%)	0 (0.0%)	8 (17.4%)	6 (15.0%)
居場所	7 (21.9%)	8 (18.6%)	13 (28.3%)	8 (20.0%)
委員会活動時	0 (0.0%)	7 (16.3%)	5 (10.9%)	1 (2.4%)
友人の付き添い	0 (0.0%)	0 (0.0%)	4 (8.7%)	0 (0.0%)
その他の理由	1 (3.1%)	1 (2.3%)	0 (0.0%)	5 (12.7%)
未記入	8 (25.0%)	14 (32.6%)	12 (26.1%)	14 (34.9%)
計	32 (100.0%)	43 (100.0%)	46 (100.0%)	40 (100.0%)

人数 (%)

の程度が強い語を線で結び、語間の共起の度合いを視覚的に捉えることができる⁸⁾。共起とは、ある語が文章中に出たとき、その文章中に別の語が頻繁に出現するという関係を示す。共起関係が強い程、語間を結ぶ線は太く描かれ、円や円内のフォントの大きさは、出現数の多い語を示している。

ネットワークの作成にあたっては、1 回生および 4 回生の回答で 3 名以上が記述した語のみをネットワーク内に表記した。さらに、図のさらなる理解のために吹き出しを用いて、円に描かれた語が実際どのように記述されていたのかを示した。

1 回生では(図 1 参照)、「優しい」「受容」「相談」「母」「しっかり」「厳しい」「叱る」が強く共起していることが分かった。「厳しい」「叱る」といった語は「優しさの中に厳しさ」「時には叱ってくれる」「しっかり叱ってくれる」などの記述により出現しており、養護教諭のイメージが肯定的かつ母性的であることが示唆された。また、「相談」「信頼」「見守る」「楽しい」「母」「受容」「救急処置」などの語については、「～してくれた」「～してもらった」と児童生徒としての観点で記述されていた。

一方、4 回生では(図 2 参照)、「職務」「手当」「救急処置」「相談」など養護教諭の職務に関する語が強く共起していた。4 回生においても「受容」「優しい」「安心感」「相談」「救急処置」といった語は「～してもらった」「～してくれた」という記述から抽出されており、「養護教諭」のイメージは児童生徒としての観点に基づくものが抽出されていた。しかしながら、「健康」「保健室」「相談」といった語は、「支援する」「情報を得られる」「教師の相談も受ける」などと記述され、養護教諭が「～してくれた」という児童生徒としての観点だけではなく、「養護教諭として～する」という養護教諭の観点となっていた。

IV 考察

1. 養護教諭志望学生のこれまでの校種における保健室利用状況と主な利用理由について

森田⁹⁾は、児童生徒の保健室利用について、一般的に 1 年間に 2~3 回以内が平均的な利用回数とし、「頻回利用がある一方、全く利用しない生徒も全校生徒の 50%であった」と記述している。本研究の養護教諭志望学生において『あまり利用しなかった』学生は、学年が上がるにつれて中学校まで減少し、中学校では 29 人(38.7%)であった。高等学校でも 35 人(46.7%)であったことから、志望学生の半数以上はこれまで保健室頻回利用者であると言えるであろう。特に、小学校高学年以降は保健室頻回利用で養護教諭から支援を受け、様々な影響を受けていたと考えられる。半

数以上の学生にとって、主な保健室利用の理由は、小学校高学年以降、「救急処置」の場から「相談」する場や「居場所」となっていたと言える。永浜らの研究⁴⁾でも「養護教諭志望学生はそれ以外の学生に比べ、保健室は悩みを相談するところとしている」と指摘している。「何となく」、「養護教諭と話すため」、「養護教諭が好きだったから」という利用理由の回答が多数あり、保健室は本人の自覚の有無にかかわらず、「居場所」であり、養護教諭は「受容」の役割を担っていたことが示唆される。志望学生の半数以上にとって、養護教諭は特に中学校時期においてメンタルヘルスのための存在であったと言える。一方、小学校高学年、中学校時期に主に「委員会活動」の場として頻回利用したと回答する学生もおり、委員会活動を保健室で活発に行いながら、養護教諭の職務を身近に観察し、魅力ある職業として感じていった学生がいると考えられた³⁾。また、どの校種においても、主に「友人の付き添い」による利用と回答した学生は少なく、養護教諭志望学生が、自ら主体的に保健室を利用していった傾向が示唆された。

2. 「養護教諭」からイメージする語について

1 回生の「養護教諭」に対するイメージは、「受容」「相談」「優しい」「厳しい」「叱る」「聴く」などの語で表されていた。志望学生の過去の経験が強く反映されており、記述には「～してくれる」「～してもらった」と養護教諭との関わりを元に「養護教諭」のイメージの語を回答していた。1 回生に質問紙調査を行った時期は、養護教諭や教職に関する講義は未履修であり「今までの養護教諭と新しい養護教諭への印象を重ねながら、新たに養護教諭との人間関係を築き、その子なりの養護教諭観をつくっていく¹⁰⁾」ことを示す結果であった。「厳しい」「叱る」といった一見マイナスのイメージを持つ語は、「優しさの中に厳しさ」「時には叱ってくれる」「しっかり叱ってくれる」などの記述により出現しており、志望学生の「養護教諭」のイメージはどの語も肯定的であることが分かった。

4 回生の回答は、養護教諭の職務や特質、保健室の機能を意識しており「職務」「救急処置」「癒す」などの特徴的な語が挙がった。学生が養成教育での学びや経験を通し、養護教諭の職務の実際を少しずつ理解していることの表れであると考えられた。前述した永浜らの研究⁴⁾でも、専門科目受講前後で養護教諭志望学生の教員や養護教諭の役割の認識が変容し、明確化されるとの報告されており、「養護教諭」のイメージに影響があると考えられた。

一方、「受容」「相談」「母」「優しい」「温かい」「聴く」などの語は、養成教育の過程で変化せず、養護教

論を目指すにあたっての根幹のイメージとも言えた。志望学生はこれまで保健室を頻回利用したことが、学生自身の養護教諭観の醸成の機会となった¹¹⁾と考えられる。保健室利用時に、養護教諭の優しさや受容の姿勢を感じ、それらが当時の学生の支えやあこがれとなっていったことで、「養護教諭」のイメージとして強く残り、学生が目指す「養護教諭」にとって欠かせない資質となっているのではないだろうか。また、鹿野らの研究¹²⁾によれば、養護教諭と児童生徒の間には、ケアしケアされる「互恵的關係」が成立すると指摘されている。養護教諭は児童生徒への支援を通し、児童生徒が成長していく様子を見つめる喜びや、養護教諭としてのやりがいを感じており、結果として、養護教諭自身も児童生徒に支援されるのである。志望学生は保健室利用時の養護教諭との関わりの中で、児童生徒を「受容」する養護教諭のやりがいを感じ、職業としての「養護教諭」を意識したのかもしれない。

また、近年、児童生徒の保健室利用状況として、心の健康問題への養護教諭の対応がどの校種においても増加しており¹³⁾、ますます養護教諭の「受容」の姿勢は重要である。従って、志望学生が「受容」、「優しさ」、「相談」の語をイメージとして挙げたことは妥当であろう。

本研究の限界として、一大学における調査であること、調査対象が少人数であることから、結果を一般化して考えるには限界がある。今後は、本研究の結果を踏まえ、追研究を行うことが課題である。

V まとめ

1. 養護教諭志望学生の半数以上がこれまでの校種において保健室を頻回利用していた。主な保健室利用理由は、学年が上がるにつれ「けが・体調不良時」で利用した学生の割合は減少し、「相談時」や「居場所」として利用した学生が増加していた。

2. 養護教諭志望学生の「養護教諭」のイメージを1年生と4年生で比較したところ、1年生では児童生徒として養護教諭と関わった経験からの観点が多く、4年生では養護教諭としての観点が増え、職務や保健室の機能を意識したイメージが増加していた。

3. 養護教諭志望学生は、これまでに関わった養護教諭のイメージを基準としており、そのイメージは養成教育において変化していなかった。「優しい」「受容」「母」などの語で示され、変化しないこれらのイメージは、志望学生が過去の養護教諭との関わりにおいて、支えやあこがれとしていた養護教諭の姿勢であると考えられた。また、目指す「養護教諭」の欠かせない資質を示していると考えられた。

参考文献

- 1) 岡田 加奈子：保健室の役割。(衛藤隆, 岡田加奈子編). 学校保健マニュアル改訂8版, 60, 南山堂, 東京, 2010
- 2) 文部科学省：平成20年度公立学校教員採用選考試験の実施状況について.
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/senkou/1217797.htm, 2010.12.19
- 3) 下村 雅昭：養護教諭養成課程を希望する学生の志望動機と養成科目に対する関心度. 京都女子大学生生活福祉学科紀要, 6, 19-22, 2010
- 4) 永浜 明子, 宮城 政也：看護大学生の養護教諭に関する認識変化～養護教諭一種免許取得希望者を対象として～. 沖縄県立看護大学紀要, 6, 64-73, 2005
- 5) 満田 タツ江, 今村 朋代：養護教諭のイメージに対する志向性や適性感の変化—養護実習の意義と学生支援のあり方を考える—. 鹿児島女子短期大学紀要 41, 193-202, 2006
- 6) KH Coder Index Page.
<http://khc.sourceforge.net/>, 2010.12.19
- 7) 丸山 和昭：「カウンセリング」のポリティクス - 国会議事録の計量テキスト分析を中心に -. 日本教育社会学会第59回大会, 331, 2007
- 8) 樋口 耕一：KH Coder 2.x リファレンス・マニュアル. 32-57, 2010
- 9) 森田光子：養護教諭の健康相談ハンドブック, 67-69, 東山書房, 京都, 2010
- 10) 塩田瑠美：養護教諭と保健室(大谷尚子, 中桐佐智子編). 新養護学概論, 45, 東山書房, 東京, 2009
- 11) 小林央美：養護活動の過程(大谷尚子, 中桐佐智子編). 新養護学概論, 57, 東山書房, 東京, 2009
- 12) 鹿野 裕美, 岡田 加奈子, 武田 淳子, 冨塚 都仁子：養護教諭と子どものケアリングプロセス—ケアしケアされる互恵的關係の諸相とケアの内実—. 学校保健研究, 51: 102-111, 2009
- 13) (財)日本学校保健学会：保健室利用状況に関する調査報告書(平成18年度調査結果). 68, 2008